

## 文明の頂点にて



竹村 公太郎  
論説委員  
(財)リバーフロント整備センター  
理事長

### 人口が示す文明の頂点

21 世紀初頭、日本の人口は減少に向うこととなった。日本の人口は江戸末期までは 3000 万人台で頭打ちの平衡を保っていたが、150 年前の明治近代化で爆発的な増加を示し、20 世紀末には 1 億 2 千万人台となった。

人口問題研究所は、日本の総人口は 21 世紀初頭から減少に向かい 21 世紀末では 6 千～7 千万人になると予測しており、歴史上はじめて構造的な人口減少を迎えることとなった。

文明の盛衰を見る視点はいくつかあるが、人口の増減はその中でも分かりやすい 1 つの指標である。この人口動態から見れば、21 世紀初頭の今が日本文明の頂点となる。

文明への視線は登山に例えられる。頂上に向かって坂を上っている時は、苦しくて今来た道を振り返れない。ましてや、坂の途中では頂上の先の景色を見通すなどできない。ただ、重荷を背負い石ころの足元を見て、転ばないように足を運んでいだけだ。山の頂上に立った時に初めて、自分たちが登ってきた道を振り返ることができる。そして、面前に広がる光景を見通すことができ、先に連なるどの峰に向かうかを選択することもできる。

登山の頂上と同じように、私たちは文明の頂点に立ったからこそ、過去を振り返り総括することができ、未来に向かって進むべき道を選択することもできる。文明の頂点にいう認識は、私たち日本人にとって重要なものとなる。

### 人類を待ち受けるもの

21 世紀、地球上の人類を待ち受けている確実な事態がある。それは、世界の人口急増であり、地球規模の環境悪化であり、資源の逼迫である。

世界人口はアジアやアフリカの途上国を中心にして、21 世紀初頭の 65 億人から 2050 年の 90 億人へ急増し続けていく。世界人口の急増と BRICs の急速な経済発展と先進国の大量消費は連動して、世界各地の耕地開発や工場立地を加速させていく。

これら人間の過剰な活動は、森林の消滅、地下水の低下、河川・湖沼の汚染と枯渇、土壌の塩分汚染、大地の砂漠化、閉鎖性水域の汚染など地球規模の環境悪化を招いていく。

さらに、近代文明を支えた石油は今世紀前半には供給ピ

ークを迎え、その後は途方もない価格高騰に見舞われていく。穀物増産を可能にした化学肥料の原料のリン鉱石はすでに供給ピークを過ぎ、価格高騰が顕在化してきている。

地球温暖化については未だ議論があるが、この世界の人口急増と地球規模の環境悪化と地球上の資源ひっ迫は確実な事態として人類を待ち受けている。

### 日本文明の進むべき道

21 世紀の未来、日本文明は存続していけるのか？存続していくための方策は何か？

その答えはそれほど難しくはない。歴史の中で滅んでいった文明を見れば容易に答えが出る。滅んでいった文明のどれも、安全が脅かされたか、食料を失ったか、エネルギーを失ったか、孤立して衰退したかであった。

日本文明の存続のため準備することは明瞭である。

将来かならず襲ってくる巨大自然災害に対して、国土の土地利用を見直して安全な国土の再構築を行っていく。世界規模の食料危機に対して、日本列島の自然資源を最大限利用し、食料の自給をしていく。そのため、近代化で損なわれた自然環境を修復する。下水道・集落排水インフラを肥料工場へと変身させリン鉱石枯渇に備える。化石エネルギーの逼迫に対して、広域型の原子力発電と地域分散型の水力発電を中心とする再生エネルギーの組み合わせでエネルギー列島を構築していく。

世界の中で日本が孤立しないよう、そして日本国内で孤立する地域がないよう、最小のエネルギーの交流ネットワークを構築していく。

災害に安全で、食料を自給し、エネルギーで自立し、有機体のようなネットワークの日本列島、これが日本文明の存続の道である。

人は自分が生きる時代を選択できない。与えられた時代で懸命に生きることが人の宿命である。

今、文明の頂点に立つ日本人は、まるでジェットコースターの頂上から落下するような不安な思いに駆られている。しかし、文明の頂点だからこそ、今まで歩んできた道がはっきりと見えるし、これから進んでいく未来も見通せる。

過去が見え、未来が見通せる時代などめったにない。このような時に生きていることはある意味で幸せなことなのだ。